

20 世紀初頭ペルーにおける 「ヌエボ・インディオ」観

小 倉 英 敬

1. はじめに

ペルーにおいては、1940 年代末より農村部から都市部への人口移動が進展し、1960 年代にはアンデス山岳部に居住していた先住民農民が都市部へと移動して、その結果ペルー社会において文化変容が発生し、「チョロ」文化と呼ばれる新しい都市大衆文化が形成された。「チョロ」文化を担う都市大衆層は「チョロ」と呼ばれ、ペルー社会全体の「チョロ」化現象が発生した。いわば、アンデス農村部から都市部への人口移動という社会変動が文化変容の現象をもたらした。

しかし、都市部から農村部への人口移動は 1940 年代末から開始したわけではない。資本主義経済がペルー社会の最深部にまで浸透し始めた 19 世紀末から小規模ながらも人口移動は始まっていた。そして、このような小規模な人口移動を大規模な人道移動への前兆であると予測する知識人も 20 世紀初頭には登場していた。

19 世紀末に発した人口移動と 1940 年代末以降に生じた人口移動は、同一の歴史的プロセスの中で生じたものであるものの異なる段階に位置づけられるものであり、直接的な原因は異なる。19 世紀末から 1920 年代に生じた社会変動は一次産品（羊毛、砂糖、綿花等）の国際市場への

統合に刺激されて進展した大土地所有制の拡大によって生じた社会変動（土地喪失、人口移動）であり、1940年代末以降に生じた社会変動は資本主義システムの農村社会への浸透が農村社会の崩壊をもたらした社会変動（離散、人口移動）である。

本稿では、前者の時期に生じた社会変動の結果、主に山岳部南部の先住民層（インディオ）にどのような変化が生じたのかを、1920年代～30年代初頭に先住民のイメージを表現した知識人の思考を整理して、資本主義システムの浸透が先住民層にどのような影響を与えたのかを検証することを目的とする。

なお、本稿の中にインディヘニスモという用語が多用されているが、インディヘニスモの定義は多様である。筆者は先住民の擁護・復権を目指す社会的・政治的傾向や先住民が直面した社会的・経済的構造を問題視する傾向を「社会的インディヘニスモ」と定義し、1910年代末から1940年代半ばまでに現れた文化的・創造的活動を「文化的インディヘニスモ」と定義して、双方をインディヘニスモと総称するが[Lauer 1997: 11]、本稿では前者を示すものとして取り扱う。両者のインディヘニスモは、ともに非先住民の側から表出されるが、他方先住民の側から表出されるものをインディアニスモと定義する。

2. 山岳部南部における社会変動（19世紀末～20世紀初頭）

ペルーの山岳部南部に位置するクスコ県及びプーノ県においては、19世紀半ばよりイギリスの毛織物工場に向けた羊毛の輸出が成長し始めた。羊毛の生産は拡大した大土地所有制の下で行われたが、労働力は近隣の先住民共同体から半封建的な経済外的強制によって確保されていた。山岳部南部の大土地所有制の下で生産された羊毛は、アレキパの商業資本

〈表—1：アレキパ商業資本家による羊毛の購入量〉

	重量（単位：キントール）	総額（単位：ソル）
1896 年	211. 32	2, 518. 45
1897 年	892. 13	12, 605. 70
1898 年	1, 752. 20	26, 598. 90
1899 年	2, 336. 45	30, 887. 75
1900 年	1, 829. 28	24, 936. 15
1901 年	953. 67	12, 423. 55
1902 年	1, 867. 87	22, 304. 30
1903 年	2, 253. 38	35, 954. 98
1904 年	2, 100. 40	37, 482. 95
1905 年	2, 196. 16	38, 165. 33
1906 年	1, 402. 68	31, 554. 35
1907 年	4, 429. 74	105, 547. 59
1908 年	1, 716. 06	26, 629. 45
1909 年	1, 769. 72	32, 995. 00
1910 年	1, 375. 90	30, 031. 25
1915 年	5, 751. 75	169, 901. 38
1920 年	3, 169. 69	118, 444. 75
1921 年	700. 75	8, 515. 25
1922 年	7, 643. 01	153, 023. 34
1923 年	7, 192. 75	228, 968. 03
1924 年	6, 922. 22	331, 764. 03
1925 年	5, 801. 54	247, 841. 68
1926 年	5, 900. 75	184, 925. 67
1927 年	7, 107. 57	264, 242. 95
1928 年	5, 701. 38	262, 623. 96
1929 年	4, 177. 15	172, 392. 15
1930 年	2, 711. 29	75, 545. 40
1931 年	3, 918. 69	83, 017. 78

(出所：Burga/Reátegui 1981：205)

家によって買収され、イギリス資本のペルー・コーポレーションが運行する鉄道で、アレキパを経て太平洋岸のモジェンダ港に搬送され、同港より輸出された。

1883年の太平洋戦争での敗戦後、砂糖、綿花、羊毛等のペルーの一次産品は国際市場への統合を加速されていったが、山岳部南部の羊毛の国際市場への統合も加速され、それとともに山岳部南部における流通の中心はクスコから商業資本家層が拠点としたアレキパに移転した。こうした羊毛の国際市場への統合が促進すると、山岳部南部における大土地所有者層や商業資本家層による土地集中が進展し、先住民農民の反乱が頻発することになった。こうした先住民農民の反乱は1930年前半まで続くことになる。例えば、プーノ県における大土地所有制の農場は、1886年の703農場から1915年には4402農場に増加した。

また、大土地所有制の拡大とともに土地を失った共同体農民や独立農で郷里を離れてクスコなどの地方都市部に移動する者が増加した。その結果、例えばクスコ県クスコの人口は、1876年の1万7370人から、1905年に1万8167人、1912年に1万9825人、1927年に2万4000人、1940年に4万6066人に増加していった [Lynch 1978: 4, Valcárcel 1981: 13]。他方、1910年代のクスコはまだ製造業部門が十分に発展していない状況であったため、人口面で増加したのは職人や家事労働従事者であり、1912年には職人は2550人で17.9%、家事労働従事者が2024人で14.2%であった。これらの人口移動は、ペルーの山岳部南部地域が資本主義市場に統合されて以後に最初に生じた人口移動であったと評価できる。

3. 山岳部南部における先住民の動向

(1) 先住民農民騒擾（19世紀末～1910年代前半）と先住民擁護運動の登場

山岳部南部においては、太平洋戦争直後より、大土地所有の拡大とい

う大きな社会変動の結果として、共同体と基盤とする先住民農民の反乱が相次いで発生した。主要な原因は大土地所有の拡大が共同体共有地の篡奪を通じた行われたこと、大土地所有制の農場に対して近隣の共同体農民が強制労働が強いられていたこと、大土地所有制の農場での小作農として労働していた先住民農民に対する過酷な収奪などに対する反発であった。1918 年までに山岳部南部において発生した主な先住民農民反乱は次頁〈表-2〉の通りである。

これらの先住民農民による騒擾事件の中で特記すべきは、1915 年 12 月にプーノ県アサンガロ郡を中心に広範囲に発生した「ルミ・マキの反乱」である。「ルミ・マキの反乱」は、1780 年にクスコ県東南部から発生し、ボリビアにまで拡大した「トゥパク・アマル 2 世の反乱」以後にペルー国内で発生した最大規模の先住民農民反乱であったと言われる。ルミ・マキとは沿岸部生まれのメスティソ（混血）の軍人テオドミロ・グティエレス・クエバス大尉である。グティエレスは 1902 年にチュクイト郡郡知事に任命され、現地で先住民農民が大土地所有の拡大によって共同体共有地を篡奪され、また労働力としても強制されている状況に同情した姿勢をとったために大土地所有者層によって忌避されて解任され、その後ビリングウルスト政権期の 1913 年 9 月にプーノ県アサンガロ郡サマン地区で生じた先住民農民による騒擾事件を調査するための調査委員会委員長に任命されて現地調査し、報告書を提出して大土地所有者層の横暴を告発したにも拘わらず、同報告書が無視されたため、1915 年半ばにアサンガロ郡に個人的意図で潜入し先住民農民を蜂起に向けて組織化を進めていった。グティエレスは「ルミ・マキ（アイマラ語で「石の手」の意）」と称し、「タワンティンスーユ連邦国家」の樹立を訴えた。グティエレスの例は、外部の人間が先住民が直面している実情に同情して、自律的な組織化能力がまだ備わっていなかった先住民を広範

〈表一2：山岳部南部における先住民農民騒擾事件 20世紀初頭～1910年代末〉

年月	場所	概要	備考
1904年10月	ブーノ県チュクイト郡ボマタ地区	大土地所有者による土地簞奪に抗議した先住民農民が騒擾事件。	個人農マヌエル・スニガ（学校運営）が反乱扇動で逮捕。
1910年7月	ブーノ県アサングロ郡カッカラコ地区	先住民農民の虐殺事件発生。	詳細不明
1911年2月	ブーノ県アサングロ郡クティン地区	先住民共同体農民の虐殺事件発生。	詳細不明
1913年2-3月	ブーノ県アサングロ郡アシリョ地区	大土地所有者勢力による共同体農民への襲撃事件。	詳細不明
1913年9月	ブーノ県アサングロ郡サマン地区	先住民農民多数が治安部隊と衝突。	詳細不明
1915年12月	ブーノ県アサングロ郡サン・ホセ農園・ワンカネ郡ラ・ウニオン農園等	大土地所有者アリアス・エチェニケ家による共有地簞奪に反発した先住民農民約2000名による農園襲撃に発した事件。反乱を全県に拡大することが目指された。	指導者はルミ・マキ（沿岸部クリオーヨの陸軍大尉テオドリコ・グティエレス・クエバ）。治安部隊の弾圧によって大量の死傷者発生。
1917年1月	ブーノ県アサングロ郡ワサコナ地区	大土地所有者による共有地簞奪に反発した先住民反乱。	詳細不明
1918年7月	ブーノ県サンディア郡・アサングロ郡	サンディア郡アンコヨ農園等を所有していた大土地所有者レオン・カブレラ家に対する蜂起。	指導者はフェリシアノ・コルネッホ・カストロ、フリオ・ルイス・メルカド（ルミ・マキの部下）。治安部隊が弾圧。
1918年5月	クスコ県パルーロ郡クシバンバ農園（ゲバラ家所有）	大土地所有者による共有地簞奪に抗議した先住民反乱	詳細不明
1918年	ブーノ県内	先住民農民約25000名が蜂起。	詳細不明

（筆者作成）

団に組織化した例である。

しかし、その後先住民の中から自らを組織化する能力を有する指導者を輩出していくことになる。その契機となったのは、インディヘニスモと称される先住民擁護運動の発足と、その活動を通してであった。

先住民農民が集団化して抗議行動を起こし、これに対して大土地所有者側もこれに対抗して武力衝突が生じるという事態の背景には、第一に 1879—83 年に生じた太平洋戦争の末期にチリ軍が一部の山岳部に侵出した際に、農村部で先住民農民の間に抵抗主体が形成されたこと、第二に 1894—95 年に発生したシビリスモ内部のカセレス派とピエロラ派の内戦が地方にも波及して、農村部にそれぞれの側に加担する武力集団が組織されるなど、先住民農民が武力集団化に慣れていたことが指摘される。このような武力集団化（武力集団化とは言っても武器の大半は銃器ではなく投石縄であった）が、大土地所有制の拡大に抗議する運動として、先住民問題を先鋭化させたと考えられる。

20 世紀初頭の先住民問題の先鋭化を背景として、1909 年に首都リマにおいて先住民の復権を擁護する運動である「先住民擁護協会 Asociación Pro-Indígena」が、ベドロ・スーレン、ドラ・マエル、ホアキン・カペーロらの知識人によってリマで結成されたことが挙げられる。先住民擁護協会は 1917 年に消滅したが、1912 年から 1917 年まで月刊の機関誌『先住民擁護の義務 El Deber Pro-Indígena』を計 51 号まで発行した。その間特別号が 2 号発行されたが、第 41 号にはプーノ県のメンバーであるフランシスコ・チュキワンカ・アユーロが執筆した「プーノ県の状況」と題する「ルミ・マキ」の反乱の報告が特集として掲載され、第 48～49 号にはマエルが執筆した「プーノ県における先住民反乱」と題する報告が掲載された。いずれもプーノ県の情勢報告が特集されていることから、1910 年代半ばにおいてはプーノの先住民に関わる状

況が中心的な問題となっていたことがうかがわれる。先住民擁護協会が目的としたことは、先住民に対する法律面での擁護と大土地所有制の打倒を目指す政治的駆け引きであった [Kapsoli 1980: 13, 23-26]。

他方、クスコにおいては、このような先住民問題の先鋭化に対する認識と、一方で保守的な概念に基づいて運営されてきた大学制度に対する批判が相俟って、1909年5月に全国に先駆けて国立クスコ大学の改革運動が発生した。同大学は、レギア政権の対応措置を受け入れて改革派の米国人教授アルベルト・ギエセケを学長に任命するとともに、ルイス・E・バルカルセルやホセ・ガブリエル・コシオのような若手の改革派の研究者を教授陣に加えることになる。

これらの若手教授陣が加盟した同大学学生連盟は、1910年に雑誌『シエラ（山岳部）』第1号を刊行し、先住民の問題等の地域的問題をとりあげるなど、国立クスコ大学が地域的な社会的問題を提起する拠点となっていく。国立クスコ大学では、1920年3月にペルー学生連盟（FEP）の第1回大会が開催されたが、同大会で設立が決定されたゴンサレス・プラダ人民大学が1924年5月10日にクスコの職人協会の事務所に設置されるなど、クスコが全国的な民衆運動の先駆けとなっていく。開会式の挨拶はバルカルセルが行い、事務局長にはカシアノ・ラドー・アクリオが就任した。

クスコにおいては、国立クスコ大学学生連盟やゴンサレス・プラダ人民大学の運動の延長線上で、1924年5月19日に先住民問題に関心を示す知識人たちが参画した雑誌『コスコ Kosko』が発行され、翌25年12月30日までに週刊で63号が発行された。第1期の『コスコ』誌の編集人にはルイス・ヤバル・パチェコ、ルイス・フェリペ・パレデス・オバンド、ロベルト・ラトーレ・メディナが参加したが、イデオロギー的には凝縮性は見られなかったものの、反レギア政権という共通性を有して

いた。他方、先住民問題に関心は示していたものの、レギア政権の先住民政策に同調した『エル・コメルシオ・デル・クスコ El Comercio del Cusco』誌の社主であったホセ・アンヘル・エスカランテや、国立クスコ大学教授のビクトル・J・ゲバラは参加しなかった。1925 年 4 月には『コスコ』の編集長が穏健派のパレデスから急進派のラトーレに代わり、同誌の性格も左翼傾向を強めていく。この時期には、急進派の学生たちがロマン・サアベドラやフリオ・グティエレスらの国立クスコ大学文学部の学生を基盤として「アンデ Ande・グループ」を結成し、機関紙『プトウトゥ Pututu』誌を発行し始めた時期でもあった。このようにクスコのインディヘニスモの運動は 1925 年を境に急進派が影響力を強めるようになる。

そして、1926 年 11 月 26 日には、『コスコ』誌や『プトウトゥ』誌の編集者や執筆者であったバルカルセル、ガルシア、パレデス、ラドー、ラトーレらが「再生グループ El Grupo Resurgimiento」を組織した。「再生グループ」はバルカルセルの提案によってイデオロギーの相違を超えて先住民の擁護のための即時的な行動をとるための運動として結成された。「再生グループ」の結成によって、クスコにおける先住民擁護運動は頂点に達したと評価される。1927 年 1 月には機関紙第 1 号が発行され、その内容はホセ・カルロス・マリエテギが編集長であったリマの『アマウタ Amauta』誌に再録された。『アマウタ』誌を通じて「再生グループ」の活動は全国的に知られることになり、インディヘニスモの代表的な運動と見られるようになる。

(2) 先住民農民騒擾（1910 年代末～1920 年代）

ペルーにおいては、1870 年代にシビリスモと呼ばれる大土地所有層と商業資本家層を基盤とした寡頭支配層の支配が確立された。その後、

シビリスモの中にはカセレス派とピエロラ派の内部分裂が生じ、本流のシビリスタ党と分派の自由党に分かれ、さらに支配層内部の権力闘争が影響してシビリスモ本流の支配は1910年代には危機に瀕していた。

アウグスト・レギアは1908～12年にシビリスモに依拠して第1次政権を樹立したが、その後シビリスモ本流との確執を深め、シビリスモ内外の進歩派や労働者・中間層の支持を背景として、1919年2月に滞在先のロンドンから帰国して同年5月19日に予定されていた大統領選挙への立候補を表明した。同大統領選挙では、レギアがシビリスモ本流の支持をも受けた自由党のアスピジャガ等到大差をつけて勝利した。しかし、パルド政権が選挙結果を無効にする可能性があったため、7月4日レギアはアルバレス大佐が率いる陸軍部隊の支援を得てクーデターを決行した。9月24日、レギアは臨時大統領の資格で議会を召集して議員宣誓式を執り行い、他方議会は即日選挙結果を認めてレギアを大統領に任命し、任期を1924年10月12日までとした。

第2期レギア政権は、その後シビリスモ本流との和解を図って保守化したため、労働者・中間層や進歩派知識人がレギア政権から離反していった。1923年5月23日、レギア政権は保守派との和解を表現するため、「ペルーをイエスの心に捧げる式典」を実施した。これに反発する進歩的知識人・中間層の反対運動を武力で弾圧して以後、レギア政権は長期的政権化を図るとともに、反動化を強めていった。

大土地所有者層による不当な先住民共同体の土地簞奪や労働力の乱用が頻発する中で、前記のようにリマにおいても、クスコにおいても、先住民問題に対する関心が高まっていった。その結果、1919年7月にクーデターによって政権を成立させた第2期レギア政権においては官製インディヘニスマが形成されて、家父長的な先住民支援政策が採られ、1920年6月には「タウンティンスーユ先住民擁護委員会 Comité Pro-

Derecho Indígena Tahuantinsuyo」が結成され、1922年5月には殖産省の中に「先住民擁護局 Patronato de la Raza Indígena」が設立された。前者は、全国先住民会議を定期的に開催して先住民の復権を鼓舞することによって、官製インディヘニスモの路線下に政権基盤の拡大を図ることを目的とし、後者は先住民からの告発を受けて、彼らと主に大土地所有者層との間に存在した諸問題の調査を行うとともに、解決策を講じる役割を果たした。

山岳部南部においては、スーレンらの先住民擁護協会や、レギア政権による官製インディヘニスモへの期待の下に、大土地所有者によって土地を簞奪されたり、強制労働を強いられる共同体農民がこれら組織に大土地所有者層の横暴を訴えたり、法的措置を要請することが増加した。次頁〈表—3〉に示した1920年代初頭に山岳部南部で発生した先住民騒擾事件においては、ルイス・コンドリ、ドミンゴ・ワルカ、カルロス・コンドレナのような指導者が先住民擁護協会や殖産省先住民擁護局とコンタクトをとるケースが多く見られた。また、ミゲル・キスベのように先住民の権利防衛のために広範囲に先住民農民の組織を図る者も出現していた。キスベはアヤクチョ県やプーノ県にも連絡役を派遣していたと言われる [Valcárcel 1981: 237]。これらの指導者たちに共通していたことは、タワントンスーユ（インカ社会）の復活願望を先住民農民の団結を図る軸としていたことである。しかし、このようなタワントンスーユ復活願望が先住民農民の主張の中に見られるのは1920年代が最後となる。

また、これらの指導者たちはクスコやリマに赴いて、先住民擁護協会や殖産省先住民擁護局と接触したり、『エル・コメルシオ・デル・クスコ』などの新聞に情報を送付するなど読み書き能力を有し、狭い共同体の外の世界を知る新しいタイプの先住民であった。先住民擁護協会やタ

〈表—3：山岳部南部における先住民農民騒擾事件 1920年代～30年代初頭〉

年月	場所	概要	備考
1920～22年	クスコ県キスピカンチス郡ラウラマルカ農園	大土地所有者による労働強制に反対する抗議から土地奪還闘争に発展。	指導者はミゲル・キスベ。キスベは県内広範囲でオルガナイザー。先住民の間にタウンティンスーユ復活願望。政府が賃金支払いを命令して暫定和解。
1920年前半	クスコ県カナス郡ラヨ地区	大土地所有者層との対立し武力衝突。	先住民擁護委員会が調査。指導者はルイス・コンドリ
1920年9月	プーノ県アヤビリ郡・アサンガロ郡	共同体共有地の篡奪に抗議して約2000名が蜂起。	先住民擁護委員会が調査。
1921年	プーノ県ランパ郡ピナヤ農園	大土地所有者ロベス・デ・ロマーニャ家による土地篡奪に抗議。	農園を襲撃して支配人等を殺害。
1921年7月	クスコ県エスピナル郡ランギ及びラヨ地区	大土地所有者による土地篡奪に抗議して約2500名が蜂起。	1910年代末より先住民擁護協会のメンバーが来訪。指導者はルイス・コンドリ。タウンティンスーユ再生を叫ぶ。
1921年12月	クスコ県エスピナル郡トクロヨック地区	道路建設強制労働法による動員、及び中間業者に対する抗議運動。羊毛の自由流通を要求。	指導者は牧民のドミンゴ・ワルカ。タウンティンスーユの再生を訴え。
1922年3月	プーノ県ワンカネ郡インチュバヤ地区	大土地所有者による土地篡奪に抗議して約4000名が蜂起。	弾圧により約500名が死傷。
1922年10月	クスコ県シクアニ市周辺	先住民蜂起（詳細不明）	詳細不明
1922年10月～23年12月	アプリマック県ワイラ地区	地域の先住民農民と大土地所有者層の全面対立。大土地所有者のバルベニオ殺害。	治安部隊が武力弾圧。指導者はクリソストモ・モリナ、オノラト・アレドンド、フェルアンド・セア等。
1922年12月	クスコ県カンチス郡サンパブロ地区	先住民蜂起（詳細不明）	詳細不明

1923年1月	クスコ県カンチス郡マルカバタ地区	大土地所有者による土地篡奪に対する抗議行動。	指導者はファウスティノー・メンドサ。
1923年1月	クスコ県キスピカンチス郡モジェバンバ農園（アヴィラ家所有）等	先住民農民1000名が蜂起。	詳細不明。
1923年1月	アプリマック県ゲラウ郡	大土地所有の拡大に対する蜂起。	詳細不明
1923年2月	クスコ県パルーロ郡ヤウリスケ地区等	土地を篡奪した大土地所有者を拘束して警察に引き渡して処分を要求。	指導者は徴兵経験者のサントス・リマチ。
1923年2月	クスコ県アンタ郡チンチャブキオ地区	大土地所有者層の横暴に対してグラナディーノ郡知事は先住民の意見を取り上げたため論争化。先住民農民の実力行使。	クスコ県先住民擁護局委員長のファルファン・クスコ大司教が介入したが、解決せず。
1923年2月	クスコ県チュンビビルカス郡キンバレテ地区	先住民蜂起（詳細不明）	詳細不明
1923年4月	クスコ県チュンビリカス郡コロチュアイ農園（ロバトン家所有）	先住民蜂起（詳細不明）	詳細不明
1923年4月	クスコ県チュンビリカス郡サントトマス地区	先住民蜂起（詳細不明）	詳細不明
1923年4～11月	アプリマック県アコマーヨ郡	大土地所有者層が先住民を支援したとして郡知事を拘束。先住民農民が反発。	詳細不明
1923年11月	クスコ県カンチス郡コンババタ地区等	先住民蜂起（詳細不明）	詳細不明
1923年12月	プーノ県ワンカネ郡サンティアゴ及びアラパ地区	大土地所有による共有地篡奪に抗議して20000名が蜂起。	指導者はカルロス・コンドレナ。トゥパク・アマルを模範。先住民擁護委員会が介入したが、弾圧される。

1923年12月 ～24年1月	プーノ県ワンカネ 郡ワンチョ地区	地域全体の収奪構 造に対する抗議行 動が先鋭化。他地 域にも拡大。	大土地所有者側が反撃。 治安部隊が武力弾圧。
1926～27年	クスコ県キスピカ ンチス郡ラウラマ ルカ地区	賃金不払い講義及 び土地奪還闘争	強力な弾圧で犠牲者多 数発生。
1931年9月	クスコ県エスピナ ル郡ヤウリ地区	大土地所有者によ る土地取得を原因 として先住民農民 が蜂起。	1921年12月に発生し たトクロヨック事件が 影響。

(筆者作成)

ワンティンスーユ先住民擁護委員会の出現は、このような新しいタイプの先住民の指導者を育てたのである。

〈表—3〉に見られるように山岳部南部、特にクスコ県、プーノ県、及びアプリマック県において、1922年10月から1923年年末に集中的に先住民農民による騒擾事件が発生した。このため、現地の大地所有者層は、これらの騒擾事件においては反乱指導者がタワンティンスーユの復活を共通して叫んだこともあり、先住民農民の間に何らかの統一的な意図が存在しているかのように憶測し、危機感を強めた。また、ロシア革命の不正確な情報が危機感を高めた。その結果、山岳部南部の大地所有者層を中心とする支配層はレギア政権の官製インディヘニスモが先住民農民の反抗精神を助長しているとして同政権に対する批判を強めた。そのため、レギア政権側もインディヘニスモ政策を骨抜きにせざるをえないように追い込まれることになった。レギア政権の保守化・反動化が1923年5月を転換点として生じたことは、このような山岳部南部における情勢とも関係していたと見られる。

レギア政権の保守化後、インディヘニスモの潮流はレギア支持派と急進派に分裂しながら、特にクスコのインディヘニスモ急進派は1926年

に「再生グループ」の結成にいたる。このグループから、先住民問題の解決は社会主義的な方向性にしかありえないと主張するとともに、国民統合を重視するリマのマリアテギを中心とする社会主義者グループよりも、「民族自決」を強調するコミンテルン（共産主義インターナショナル）の近い立場をとるクスコの共産主義者グループが台頭することになる。

4. 「ヌエボ・インディオ」論

前記したように19世紀末から1920年代にかけて山岳部南部において生じた大土地所有制の拡大を原因として出現した先住民擁護運動の広がりによって影響を受ける形で、共同体を越える広い社会的意識を獲得する指導者が登場してきた。いわば先住民農民の中に新しいタイプの先住民が形成され始めたのである。彼らは先住民農民が大土地所有者層と具体的な対立関係に至った際には、反乱指導者としての役割を果たした。このような先住民農民の擁護運動の進展に伴って、前記の通り、インディヘニスモと称される潮流が登場する。ここでは、1910年代から顕著になったインディヘニスモの知識人において、先住民のイメージがそれ以前の時期に比べてどのように変化していったかを見ていく。

(1) バルカルセル（Luis Eduardo Valcárcel 1891-1987）の「ヌエボ・インディオ」

バルカルセルは沿岸部のモケグア県イロに生まれ、1892年に家族とともにクスコに移転し、1930年にリマに移転するまでの38年間でクスコで過ごした。1909年に国立クスコ大学に入学し、卒業後は同大学で教鞭をとり、同大学学生連盟の会長、雑誌『コスコ』誌編集委員、「再

生グループ」メンバーを経て、クスコ・インディヘニスモの中心となった知識人である。バルカルセルは、1925年5月に発行された『コスコ』に掲載された論稿「ペルーにおける人種問題の新しい方向性」において、「アメリカの腹腔から新しい人間が生まれた。インカ文化のあらゆる母性的影響がわれわれの中に生きている。われわれの体の中を流れる血液のように、われわれの精神に神秘的にめぐっている。(中略) 諸文化が混合された。アメリカの風から新しい混血種が生まれた。彼らは祖先から徳を継承せず、欠点と欠陥を継承した。諸文化の混合からは奇形以外のものは生まれない」と述べ、先住民文化への復古主義的な傾向を示すとともに、「メスティソ化」に否定的な意見を述べた。

その後、バルカルセルは1926年11月に後述のガルシア等とともにインディアンニスモとインディヘニスモの横断的な集団である「再生グループ」の結成に参加した。1927年3月に発行された雑誌『アマウタ』に「先住民問題」と題する論文を掲載したが、その中で「アンディニスタ運動を指導する能力のある唯一のエリートは、人種的あるいは精神的にインディオに近く、インディオと一体化するが、あらゆる逆境と対決し、イデオロギーの迷路に道を迷うことのないよう、極めて広範な準備、広い視野、真剣な精神、ストイックな微笑みを有する人々によって構成されるであろう。この選別的なグループは、ヨーロッパ化には抵抗し、インディアニダを防衛するためにヨーロッパ文化から吸収する」と述べ、文化的「メスティソ化」を肯定するかのような表現をするに至る。

他方、同年に出版した『アンデスの嵐 Tempestad en los Andes』においては、「再びアンデスから文化が流れる」、「アンデスから河が生まれるように、ペルーを変革する維新の潮流が生まれなければならない」、「エレガントな近代的な寄生的ビールスが、ヨーロッパ化した首都の港から浸透している」、「シエラ（山岳部）がナショナリティである。ペル

ーは親密なもの、真実なるものから程遠く、自らの外で生きている」、
「いつかアンデスの人々が軍勢のように駆け下るだろう。低地の帝国に
とっての蛮族が山の向こうに存在する。彼らは必然的な進化を遂げるだ
ろう」[Ibid. 103-116]と述べる一方で、「ヨーロッパ風の服を着て、英
語を話し、西洋流に考えても、インディオはその精神を失わない」、「あ
らゆるものを律する至上の法則であるたゆまぬ変革が重要である。(中
略)文化の舞台にアンデスの人々の再登場を示すことが重要である。新
時代的人类は西洋科学の達成物と東洋の諸賢人の知恵でその資産を豊か
にすることになろう。西洋と東洋の調和が生まれる」[Ibid. 21-23]と
述べた。バルカルセルは『アンデスの嵐』の中においても、文化的混淆
を肯定的に捉えたのである。

さらにバルカルセルは同書の中で、1940年代末以降に顕著になる先
住民農民の都市部への移動を予見するとともに、「アンデスから文化が
駆け下る」、しかし先住民は都市部においてクリオーヨ文化に触れたと
しても「その精神は失わない」[Ibid.: 21]と主張した。

バルカルセルは1920年代における表現の中で、先住民が山岳部で培
われたインカ時代からの精神性を持続し、あるいは再生して「維新の潮
流」を形成し、ペルー社会の変革において再び重要な役割を果たすこと
を望んだのである。バルカルセルは、ペルー社会は「インディオ化
Indigenización」されると予測したが、主体はあくまでも生物学的な先
住民であった。特にバルカルセルが重視したのは、先住民的な精神性
(私利私欲を越えた高潔な精神、協同労働の伝統で培われた相互扶助精
神等)の再生であった。このような精神性を表現できるのは、バルカル
セルにとって、共同体外の世界とも接触し、メディアとの駆け引きをす
るようになる一方で、共同体に戻ってインカ社会の復活を先住民の結集
軸とした先住民農民の指導者であった。バルカルセルが重視したのは、

特にミゲル・キスベであった。このような指導者が、バルカルセルにとっての「ヌエボ・インディオ」[Ibid. 69] であった。

(2) ガルシア (José Uriel García 1884–1965) の「ヌエボ・インディオ」

ウリエル・ガルシアは、クスコ県キスピカンチス郡アンダワイリジャス町近くのワロック村出身であり [Valcárcel 1981 : 209] (クスコ近郊のサンセバスティアン村出身との説もあり [Tamayo 1980 : 197])、母子家庭出身である。貧困家庭であったため、1907年に漸く国立クスコ大学に入学し、1909年の大学改革運動に参加した。同大学学生連盟、雑誌『コスコ』、「再生グループ」を通じて常にバルカルセルとともに歩んだが、1925年頃から両者の間に見解の相違が顕著になり始める。ガルシアは、1919年より国立クスコ大学で教鞭をとったほか、1950年代にはリマの国立サンマルコス大学教授となり、1939—45年と1950—56年の2期にわたり上院議員を務めた。

ガルシアは、1930年1月にバルカルセルの『アンデスの嵐』に反論するために『ヌエボ・インディオ El Nuevo Indio』を出版した。ガルシアは、この『ヌエボ・インディオ』の中で、メスティソ文化の創出に基づく「メスティソ＝ヌエボ・インディオ」の形成を主張した。バルカルセルが先住民が先住民的な精神性を再生することで「ヌエボ・インディオ」になると主張したのに対して、ガルシアは先住民は文化変容を通じて「ヌエボ・インディオ」に転換すると主張したのである。

ガルシアはまず、「現代はもはや、過去に独創的な文化を創出した人種の再生の時代ではありえない。(中略) 人種に対して、血液に対して、精神が優越する時代に到達している。(中略) 先住民と呼ばれるものは現在、過去において有していた意味を持ってはいない」と述べ、生物学的な人種よりも文化や精神性が優越する時代に至っていると主張して、

バルカルセルを批判した。そして、「シエラの痛みがメスティソを創り出し、その中にもう一つの生命の意味が生まれた」[García 1973: 111]と述べ、植民地化による先住民系の人々の痛みを通じてメスティソが形成されたが、これらメスティソの精神はアメリカに生命を吹き込むアンデスの精神であると称揚し、これを体現した者としてインカ・ガルシラツソ・デ・ラ・ベガ、トゥパク・アマルを挙げる。これらの人物からも明らかなに、ガルシアの「メスティソ＝ヌエボ・インディオ」は、人種的には混血化しつつも、精神的には先住民の精神性に根を下ろし、他方で西欧的先進性をも兼ね備える存在である。ガルシアは「アメリカのメスティソ化により将来に向けて前進する新しい精神が発生し、インディオに青年の精神を植え付け、これを新しいインディオに変える」と述べている。即ち、メスティソ化の進展により、先住民も新鮮な精神性を吹き込まれて「ヌエボ・インディオ」に転化しようと主張した。ここで留意しておくべき点は、ガルシアの「ヌエボ・インディオ」には二つの類型、即ち先住民の精神性に同化したメスティソ（更にはクリオーヨ）と、新しい精神を植え付けられた先住民が存在することである。

ガルシアの場合、この「ヌエボ・インディオ」が「チョロ」とどのような関係に位置づけられるかについて、「先住民女性との愛からチョロやチョラが生まれ、彼らが新しいインディアニダの親になる」、「先住民、チョロ、及び白人の間には、憎悪が相互に存在する、それは互いに落差のある個性であるからである」[Ibid. 112]と述べ、「チョロ」を「メスティソ」に近い捉え方をしている。

しかし、「チョロ」の定義については詳述しておらず、チョロ女性については、「先住民とクリオーヨの間の根源的な統一をなす大衆の精神を醸成するもの」、「シエラの民の精神の母」であり、「若返りの有機的な力」と述べ、それ故に「先住民女性がチョロ女性に転化すれば

精神的活力を回復する」[García 1973 : 190] と評価する。

このようにガルシアは、先住民からチョロへの転化を精神性の若返りとして肯定的に見る。そして、「チョロ女性は時代毎の変化に実践的に対応する精神である」として、先住民女性が伝統を英雄的に防衛するものであるのに対し、チョロ女性は時のリズムに適応しやすく、「先住民女性は純粋なインディアニダを防衛するが、チョロ女性はその時代に応じてインディアニダを創造する」[Ibid. 193]、「先住民女性はチョロ女性に向かうが、チョロ女性は未来に向かって歩む」と述べている。

ガルシアの「ヌエボ・インディオ」に関する主張は、「メスティソ＝ヌエボ・インディオ」の登場を指摘し、更に「チョロ」が有する時代即応性を評価して、「ヌエボ・インディオ」を「チョロ」の系譜的な「親」として位置づけている。そして、ここで注意しておくべきことは、このようなガルシアの「ヌエボ・インディオ」論は、一般に単純化されている「メスティソ化」についても人種的な意味での「メスティソ化」ではなく、精神的な「メスティソ化」を想定しており、純粋な先住民さえもが精神的には「メスティソ化」していると指摘し、「ヌエボ・インディオは血液よりも精神でなければならない。(中略)ヌエボ・インディオは本来的にエスニック・グループではなく、特に精神的な存在である」と指摘していた点である [Ibid. 8-9]。ガルシアは、先住民の変化を論じることで、時代に先駆けて「文化変容」について論じていたのである。

(3) マリアテギ (José Carlos Mariátegui La Chira 1894-1930) の「ヌエボ・インディオ」

マリアテギは、ラテンアメリカにおける 20 世紀最大のマルクス主義思想家と呼ばれる、沿岸部のモケグア県出身の先住民系の濃いメスティソ知識人である。マリアテギは、ペルーのネイションは形成過程にあり、

ネーション形成のためには先住民問題の解決と先住民の国民統合が必要であると主張し、先住民の自発的な行動に「ヌエボ・インディオ」の発現を見た。マリアテギが、アイデンティティ問題や国民統合の問題を提起したのは、『エル・ムンディアル』誌に「ペルーをペルー化しよう Peruanicemos al Perú」と題する1924年10月24日から29年7月19日まで掲載した連載コラム欄においてであった。そして、1928年12月に出版した主要著作である『ペルーの現実解釈に関する7試論 Siete Ensayos de Interpretación de la Realidad Peruana』において、それまでの主張を集大成して次のように論じた。(イ)ペルーの最大の問題は先住民問題であり、それは最終的には土地問題であるから、その解決は封建制の打倒を通じて実現しなければならない、(ロ)ペルーのナショナリティは先住民層を基盤として形成過程にあり、それは土地問題の解決を通じて先住民の国民生活への統合が進まなければならない、(ハ)他方、メスティソは植民地支配の遺産であるのでナショナリティの基軸にはなりえない、(ニ)先住民の闘争は反封建闘争であるが、他方都市部においては社会主義の思想的影響下で労働者階級の闘争が行われているから、社会主義的精神を先住民共同体の中に維持する先住民農民は、社会主義思想を通じて労働者階級の闘いに合流する、(ホ)従って、ペルーのナショナリティは、先住民層を基盤として、インディヘニスモと社会主義の合流により、先住民系のものと西洋的なものが合流する形で実現される。

マリアテギは、1920年代後半に既に発表されていたガルシアの「ヌエボ・インディオ」の概念に関して、「ガルシアはメスティソにヌエボ・インディオを見出すが、このメスティソは、スペインと先住民の混血に由来して、アンデスの環境と生活に従っている。ガルシアの研究に位置する山岳部の環境は白人征服者を同化した」、「二つの人種の腕の中

から、地域的な伝統と環境に強く影響されたヌエボ・インディオが発生した。このメスティソは沿岸部に発生したメスティソとは異なる。」と述べ、先住民層の精神と生活環境を継承したメスティソをナショナリティの基盤として提示しているかのように論じた。しかしながら、マリアテギはこの山岳部の環境から生まれたメスティソをペルーの国民的なナショナリティとして提起した訳ではない。マリアテギはこの点に関して、「ペルアニダ Perianidad は未だ定義されようとしており、明確化されようとしている」に過ぎないのであり、「新しいペルアニダはこれから創造されようとしている」と述べ、「もしペルアニダをスペインによる征服と植民地化によって決定された社会的構成体として理解するなら、歴史的にはガルシラッソが最初のペルー人である」と論じている[Mariátegui 1988 : 260-274]。つまり、ガルシアが「ヌエボ・インディオ」の例として掲げるガルシラッソが「最初のペルー人」であると考えられると述べているに過ぎず、他方ペルーのナショナリティである「ペルアニダ」は未だ「定義」と「明確化」もされておらず、「創造される」べきものであると論じたのである。

マリアテギは、1927年に出版されたバルカルセルの『アンデスの嵐』に序文を書き、その中で「ヌエボ・インディオ」について言及している。まず、バルカルセルが主張する「先住民の再生」を「新しい先住民意識の形成」と理解して称揚する。そして、「ヌエボ・インディオ」の例として、農牧民は今や過去と同様ではなくなっていると指摘し、特にプーノ県の農民運動の指導者であるエセキエル・ウルビオラの名を挙げて、「ヌエボ・インディオ」は「架空の存在でも、抽象的な存在でも」なく、「生き生きとした、現実的で、能動的」な存在である論じている。そして、「ヌエボ・インディオ」こそ、「バルカルセルが最も熱烈な一人であるインディヘニスモの真の特性を説明し、際立たせるものである」と述

べ、「先住民の再生に対する信念は、ケチュアの大地の物質的な西洋化から生じるのではなく、先住民の精神を鼓舞するのは神話であり、その神話とは社会主義革命の思想である」と結論づけている [Mariategui 1972 : 10-11]。

このようにマリアテギが表現した「ヌエボ・インディオ」とは、バルカルセルやガルシアと同様に共同体の外部と接触して先住民意識を高めた指導者たちであると同時に、その中でもエセキエル・ウルビオラのように明確な社会主義思想を体得した新しい先住民の人物像であったと言える。

5. 「ヌエボ・インディオ」と「チョロ」の関係性

ペルーにおいては、特に山岳部南部においては、太平洋戦争敗戦後に加速した羊毛生産の国際市場への統合をきっかけとして大土地所有制が拡大し、その結果共有地を篡奪された先住民農民を主体とする反乱とも呼びうる騒擾事件が多発した。しかし、これらの騒擾事件の背景には、大土地所有制の拡大という客観的条件だけでなく、先住民農民の間に共同体の枠組みを超えた活動を実践するようになった指導者層が育ったという主体的要因があった。このような指導者層の登場には、1909年に成立した慈善的な民間団体であった先住民擁護協会の活動や、レギア政権下で設立された殖産省先住民擁護局やタウンティンスーユ先住民擁護委員会のような官製インディヘニスモの政策が影響した。言わば、大土地所有制の拡大による共有地の篡奪と、他方で先住民擁護運動が新しいタイプの先住民の指導者の登場をもたらした。

1920年代半ば頃から、山岳部南部のクスコを中心としてバルカルセルやガルシアのような知識人に代表されるインディヘニスモと呼ばれる

潮流が生まれ、それがマリアテギのような首都リマの知識人にも影響を与えた。これらの知識人は、主に先住民運動の指導者たちを視野に入れて新しいタイプの先住民が登場してきたと位置づけて、彼らの存在にペルーの将来像を重ね合わせた。これが個々には概念の相違はあるとはいえ、1920年代に創出された「ヌエボ・インディオ」像であった。

1920年代に展開された種々の知識人の「ヌエボ・インディオ」像の中で、その後のペルーに生じた「チョロ」化現象を予測していたのは、ガルシアの「ヌエボ・インディオ」像である。ガルシアは、その後1949年に出版した『ペルー南部の人々と風景』において、「封建的不平等の子孫であり、被搾取階級の構成要素であるメスティソはチョロと呼ばれる」と述べ[García 1949: 9]、さらに1950年に執筆した「ペルー社会学の諸問題」と題する論稿の中で、「文化のメスティソ・リズムの中でのみ、イスパニスモにより抑圧され、ユートピア的なインディヘニスモにより切り捨てられたペルー人の解放が実現される」と述べ、ペルーのナショナリティの模索における文化的メスティソ化＝チョロ化の主張を強めるとともに、イスパニスモからもインディヘニスモからも解放されたアイデンティティの形成を主張した[García 1950: 49]。

ペルーにおいては、1940年代末から農村部から都市部への人口移動が加速化し、都市部に到着した先住民系の人々は都市部において先住民文化とクリオヨ文化の混淆の上に「チョロ」文化と呼ばれる新しい大衆文化を形成した。この「チョロ」文化については、先住民系の人々がクリオヨ文化に最終的に吸収されるまでの過渡的なアイデンティティであると見るのが適切かと思われるが、20世紀半ばから21世紀初頭のペルーは未だ「チョロ」文化がペルーのナショナリティを体現する文化であるような印象を与えている。

このように20世紀半ばに本格化した「チョロ」化現象とは、その言

葉が本来意味していた人種の混交から生じたものではなく、文化の混淆から生じた現象である。この意味合いにおいて、文化の混淆を通じた文化変容をペルーの将来像として予測しえたのはガルシアであったのである。

一方、バルカルセルは、自らの研究対象であるブレ・スパニッシュ期の諸文化の研究成果への思い入れからか、先住民が共同体に根差した精神性を活性化し、再生することにペルーの将来像を予測した。しかし、その後のペルーの歴史は、先住民が長期的にはクリオーヨ文化に適応していく方向性を示してきたのである。言うなれば、バルカルセルが予想した方向にはペルー社会は進まなかった。

他方、マリアテギはガルシア的な「ヌエボ・インディオ」像を有していたと言える。しかし、マリアテギにおいてはエセキエル・ウビオラを先住民として理想視したことにもうかがえるように、社会主義思想を体得することが条件となった。それ故に、西洋文化一般にも適応していく先住民像が描かれていたわけではない。

また、ガルシアの「ヌエボ・インディオ」像においては、クリオーヨ文化に適応する先住民と、山岳部の環境に適応するメスティソ（更にはクリオーヨ）が「ヌエボ・インディオ」になりうると提起されていたが、実際の歴史プロセスにおいては、後者のような例も散発的には生じたことは事実であるものの、歴史的な流れとしては前者こそが「チョロ」化を予想したものと捉えることができよう。

6. 終わりに

世界資本主義システムが「自由主義」の段階で現在の途上地域の農村部に浸透した結果として、大土地所有制の拡大を通じた土地所有構造の

変化という社会構造の変化を生じさせ、それが先住民反乱を通じて新しい精神性を獲得した「ヌエボ・インディオ」を登場させた。言わば、ペルーにおいては資本主義経済の浸透という形で進展したグローバル化の結果、土地所有構造の変化が生じ、その結果先住民層に文化変容を生じさせた。

このような文化変容は、その後さらに進展した。資本主義システムが農村部の最深部にさらに浸透して農村社会を崩壊させて、農村部から都市部への人口移動が生じたことにより、先住民農民の都市部への移動がペルー社会の「チョロ」化という更に大きな文化変容を生じさせた。

本稿で扱った例は、世界資本主義システムの浸透が、生存維持経済に基づく伝統的社会に生きてきた人々に文化変容を生じさせる典型的な一例であると考えられる。

参考文献

後藤雄介

- 1996 「ペルー・インディオヘニスム再考：〈メスティサヘ〉の視点から」『ラテンアメリカ研究年報』16: 34-59

小倉英敬

- 1996 「現代ペルーにおけるナショナル・アイデンティティ問題——〈チョロ〉問題の検証」、『イペロアメリカ研究』第XVIII巻第1号

- 2002 『アンデスからの暁光 マリアテギ論集』、現代企画室

Burga, Manuel/Reátegui, Wilson

- 1981 *Lanas y Capital Mercantil en el Sur la Casa Ricketts 1895-1965*, Instituto de Estudios Peruanos, Lima

Deustua, José/Rénique, José Luis

- 1984 *Intelectuales, Indigenismo y Descentralismo en el Perú 1897-1931*, Centro de Estudios Rurales Andinos “Bartolomé de las Casas”, Cusco

Flores Galindo, Alberto

- 1994 *Buscando Un Inca: Identidad y Utopía en los Andes*, Editorial Horizonte, Lima
- Flores Galindo, Alberto/Plaza, Orlando/Oré, Teresa
- 1977 *Oligarquía y Capital Comercial en el Sur Peruano 1879–1930*, Pontífica Universidad Católica del Perú, Lima
- García, José Uriel
- 1949 *Pueblos y Paisajes Sudperuanos*, Editorial Cultura Antártica, Lima
- 1950 “Problemas de Sociología Peruana” en *Cuadernos Americanos* Vol. 1
- 1973 *El Nuevo Indio*, Editorial Universo, Lima
- González Prada, Manuel
- 1991 *Obras Completas TomoI*, Ediciones COPÉ, Lima
- Kapsoli, Wilfredo
- 1980 *El Pensamiento de la Asociación Pro-Indígena*, Centro de Estudios Rurales Andinos “Bartolomé de Las Casas”, Cusco
- Lauer, Mirco
- 1997 *Andes Imaginarios: Discursos del Indigenismo 2*, Centro de Estudios Regionales Andinos “Bartolomé de Las Casas”, Cusco
- Lozano Alvarado, Saníel
- 1982 *Ande e Indigenismo Identidad y Conflicto*, Universidad Nacional de Cajamarca, Cajamarca
- Lynch, Nicolás
- 1978 *La Polémica Indigenista y los Orígenes del Comunismo en el Cusco*, Pontífica Universidad Católica del Perú, Lima
- Mariátegui La Chira, José Carlos
- 1972 *Prologo en Tempestad en los Andes*, Editorial Universo, Lima
- 1988 *Siete Ensayos de la Interpretación de la Realidad Peruana*, Amauta, Lima (原田金一郎訳『ペルーの現実解釈のための七試論』、柘植書房)
- Ramos Zambrano, Augusto
- 1985 *Movimiento Campesinos de Azangaro: Rumi Maqui*, Instituto de Investigaciones para el Desarrollo Social del Altiplano, Puno
- 1990 *Tormenta Altiplánica Rebeliones Indígenas de la Provincia de Lampa-Puno 1920–1924*, CONCYTEC, Lima

Sarkisyana, Manuel

- 1992 Temblor en los Andes: Profetas del Resurgimiento Indio en el Perú, Ediciones ABYA-YALA, Quito

Tamayo Herrere, José

- 1980 Historia del Indigenismo Cuzqueño Siglos XVI-XX, Instituto Nacional de Cultura, Lima
- 1982 Historia Social e Indigenismo en el Altiplano, Ediciones Trentaitres, Lima
- 1989 El Cusco del Oncenio: Un Ensayo de Historia Regional a Través de la Fuente de la Revista "KOSKO", Universidad de Lima, Lima

Tord, Luis Enrique

- 1978 El Indio en los Ensayistas Peruanos 1848-1948, Editoriales Unidas S. A., Lima
- Valcárcel, Luis E.
- 1972 Tempestad en los Andes, Editorial Universo, Lima
- 1981 Memorias, Instituto de Estudios Peruanos, Lima

Vasquez, Emilio

- 1976 La Rebelión de Juan Bustamante, Librería-Editorial Juan Mejía Baca, Lima